不眠不休の救急対応

大船渡病院の被災医師、看護師

院内泊まり込み 住居確保が課題

東日本大震災で大きな被害を受けた大船渡市の県立大船渡病院（八島良幸院長）で、医療スタッフの住居確保が課題になっている。津波で家を失った医師や看護師は入居先のめどが立たないまま、院内に泊まり込みで被災者の救急対応などに当たっている。市内のアパートや宿泊施設は津波で崩壊。家族の安否さえ分からない職員もいる中、先の見えない不安を抱えながら不眠不休の業務が続く。

避難生活で体調を崩し運び込まれる被災者、薬を求める長い列。大震災から10日がたち、医師や看護師に疲労の色がにじむ。

同病院では、医師や看護師ら約150人が津波で帰る家を失ったり、ガソリン不足で帰宅できない人も。院内の診療ベッドや処置台、椅子、床に敷いた段ボールの上で夜を過ごしている。津波で医師公舎や市内のアパート、宿泊施設の多くが損壊。被災した職員の住まいのめどは立っていない。

村田幸治事務局長は「寝ずの勤務で疲弊はピークに達している。できるだけ休ませながら病院機能を維持したい」と話す。内陸部からは医師や看護師、薬剤師らが応援に駆け付け、業務の負担軽減を図っている。

しかし、県立高田病院が被災したため、陸前高田市の患者も薬を求めて大船渡病院に押し寄せる。避難生活が長引くことで今後、救急患者が増えることも予想される。薬や入院患者の食料、暖房用の重油や寝具の確保、家族の安否など職員の不安は尽きない。

八島院長は「職員はみんな頑張っているが環境が劣悪だ。衣食住の特に住を安定させたい」と解決策を模索するが、なかなか妙案は見いだせそうにない。

救急対応に追われる医師や看護師。震災で住まいを失った職員も多い＝大船渡市・県立大船渡病院

「卵どうぞ」。自慢の卵を笑顔で被災者に手渡す山下裕一さん（左）＝大船渡市三陸町越喜来

新鮮卵、被災者に届ける

大船渡の山下さん 避難所まで徒歩で

大船渡市三陸町の越喜来地区で、被災を免れた養鶏農家山下裕一さん(40)が連日、数キロ離れた避難所まで歩いて新鮮な卵を届けている。燃料不足にも負けない奉仕の心に、被災者から「この恩は忘れない」と感謝の声が上がる。

がれきの山を縫うように、100個近い卵を持った山下さんが黙々と歩く。「こんな時に商売しても仕方がない」。震災翌日から自家発酵飼料で育てた自慢の卵を手に避難所や知人宅などを訪ねている。当初は車で運んでいたが、燃料不足で歩くことにした。

越喜来地区は市街地が津波で壊滅し、生鮮食品は手に入りにくい。被災者にとって卵は貴重な栄養源となっている。遠い避難所には、通りかかった人が車で送り届けてくれることもある。

卵を受け取った同地区の嘉志一世さん(60)は「歩いて持ってきてくれる。その気持ちが何よりありがたい」と感謝する。

山下さんは「被害が大きすぎて言葉も出ない。卵がある限り続けたい」と街の復興を願って歩き続ける。

祖母との会話に笑みがこぼれる男児。携帯電話の通話可能地域は少しずつ広がりつつある＝21日午後4時、大船渡市三陸町越喜来

久々の会話 広がる笑顔

携帯電話、徐々に復旧 大船渡

大船渡市で携帯電話の通話エリアが徐々に広がっている。21日は避難所近辺でも家族や友人と久しぶりの会話を楽しみ、携帯電話を手に笑みを広げる姿も見られた。

「欲しい物はあるか」。携帯電話の向こうから懐かしい声が届く。同市三陸町越喜来の住民が避難する旧花菱縫製前には、携帯電話を手に笑ったり涙を流したりする女性もいた。

市によると、通話エリアが拡大したのはNTTドコモ。これまで避難所内にある衛星電話が唯一の連絡手段だったが、周囲に気兼ねなく話せる環境が一部地域で戻りつつある。

越喜来診療所の佐々木道夫医師(61)は「携帯電話が通じたことで、みんな明るくなった。心理的な効果はとても大きい」と歓迎する。

県内外にいる家族や親類、友人から電話やメールが次々と届く。

停電が続く同市三陸町の崎浜地区でも一部地域で通話が可能になっている。崎浜公益会長の遠藤喜隆さん(69)は「家族や親戚に連絡を取れるようになったことが何より大きい」と喜ぶ。

大阪の街頭で募金呼び掛け

本県など関西県人会

東日本大震災の被災者への募金に応じる女の子＝21日午後、大阪・ミナミ

「ふるさとに支援を届けたい」。東日本大震災で被災した岩手、宮城、福島3県の関西県人会のメンバーらが合同で21日、大阪・ミナミの街頭で募金を呼び掛け、家族連れなど多くの人たちが足を止めていた。

壊滅的な被害を受けた宮城県石巻市出身の自営業三浦宏幸さん(38)＝大阪府豊中市＝は、兄と同居していた母親の笑子さん(63)の消息が分からないまま。「いま現地に行っても足手まといになるだけ。少しでもふるさとの助けになれば」と声を張り上げた。

岩手県人会の鎌田龍児会長(73)は「ふるさとへの精いっぱいのエールを送りたい」と話し、福島県人会の箭内一会長(68)も「厳しい避難生活を強いられる人たちが一日も早く安心して暮らせるように」と願った。

集まった義援金は各県の災害対策本部などに託すという。

被災ペット行き場なく

動物病院は満杯状態

避難所でトラブルも

保護されたシバイヌを診療する田口庸蔵院長（左）。このような被災動物の受け入れが課題となりそうだ＝21日午前11時すぎ、宮古市・グリーン動物病院

飼い主と共に被災した犬猫などのペットが、行き場に困るケースが急増している。宮古市では動物病院などが避難所で受け入れられない状態。避難所では、ペットの存在が飼い主の癒やしとなっている一方、動物との共同生活が住民間で問題を起こすことも少なくない。被災動物の保護は今後も増えることが予想され、受け入れ態勢の拡充が急がれる。

宮古市宮町のグリーン動物病院には21日、市内で衰弱していたところを保護されたシバイヌが運び込まれた。田口庸蔵院長(62)は血液検査や点滴後、回復するまで保護することにした。犬には首輪の跡があり、津波で避難する際に飼い主が逃がしたことも考えられるという。

同病院では、犬猫30匹やオウムなどの鳥を保護。部屋はいっぱいで、スタッフ3人が毎日世話をする。ほとんどが避難所に連れて行けなかったペットだ。

宮古市では同病院など3カ所で、被災動物を飼い主が元の生活に戻るまで保護。田口院長は「今後は震災で飼い主を失ったペットの保護も増える。被災した沿岸で受け入れるのは難しく、全県で里親を探していく必要がある」と指摘する。

避難所でも、ペットの扱いは悩ましい問題だ。約370人が避難する宮古小では、犬と一緒に体育館内で生活する飼い主が10人ほどいる。避難間もないころは興奮してほえたり、校内でふんをするなどし、ほかの住民から苦情が相次いだという。

そのため学校側や住民代表は、外に出た犬は体を洗うなど衛生面に気を付けることを飼い主と確認。主に小型犬だったこともあり、今は共同生活を容認している。

同校の川上良治副校長は「大災害の後だけに、ペットを心の支えにする飼い主から引き離すことはできない。話し合いを重ねて、共生の形を考えるしかない」と理解を求める。

3地域に7支援拠点病院

県獣医師会 対策本部を設置

県獣医師会（金田義宏会長、会員625人）は災害時動物救護対策本部を設置。釜石・大船渡、宮古、久慈の3地域に支援拠点病院を計7カ所確保し、ペットに関する相談業務を行うほか、同病院や各市町村の災害対策本部にドッグフードやケージ、ペットシーツなどの資材物資を送っている。現地の動物病院が大きな被害を受けた大船渡市や陸前高田市には、一関支会関係者が支援する。

県内の支援拠点病院と連絡先は次の通り。

▽釜石・大船渡　タカサワ動物病院（0193・23・1082）釜石動物病院（0193・25・0512）▽宮古　グリーン動物病院（0193・64・0856）アトム動物病院（0193・67・3993）▽久慈　久慈動物病院（0194・61・1414）佐々木獣医科医院（0194・52・2100）動物病院なつい（0194・53・3839）

在宅者にも物資配給 山田町

避難所で食料品の配布を受ける住民＝山田町

山田町は避難所を拠点に、在宅者にも食料品を配給している。21日は防災行政無線で周知し、午後4時半に町内数カ所で配給。同町大沢の町ふれあいセンターでは、パンやお茶、ゼリーを1個ずつ配布した。

震災から10日たち、町内の避難所にはコメやパンなどの物資が順調に運び込まれつつある。一方、被災を免れた世帯はライフラインの復旧が遅れ、満足な生活を送れていない。町内のスーパーも被災し、ガソリン不足も相まって物資の確保が困難になっている。

配給を受けた同町大沢の漁業福士健(たけし)さん(36)は自宅の被害はなかったが、電気や水道は復旧していない。福士さんは「今までは知り合いからもらった物で食いつないでいた。ガソリン不足で買い物も最小限にしていて、配給はありがたい」と話す。

町内には車を地域に走らせ、配給を知らせる住民団体もある。